

民医連の仲間みなさんへ

坂総合病院 院長

今田 隆一

未曾有の大震災から3週間が過ぎました。被災地では少しずつ、落ち着きを取り戻しつつありますが、改めて失ったものの大きさに心を痛めています。当地でもっとも被害の大きかったところのひとつである七ヶ浜町菖蒲田浜では470戸あった集落のうち、400戸が津波被害のために全壊、流出し、高台からみると海岸まで素通しになってしまいました。そこには呆然と立ちすくむ住民の方々の姿しか見えません。たくさんの方々が亡くなりましたが、死者を弔うことすらかなわない方も数多く、住まい、近所との交流、働き場、家族団らんのみならず、死者にかける言葉すら奪われてしまった過酷な状況がそこにあります。

そんな中であって私たちは医療に働くものとして民医連の旗を掲げて頑張ってきました。文字とおりに不眠不休の毎日でしたが、全国の仲間の支援のおかげでこれまで来ることができたと感じています。3月31日に全職員集会を、4月1日に医局会議を持ちましたが、そこで語られたのは被害のひどさと同時に全国のみなさんによる熱い支援への感謝でした。そして「明けない夜はない」との確信に支えられながら、私たちも引き続き、頑張っていく決意を固めました。

3週間たった今でも避難所にはたくさんの方々がいらっしゃいます。昨日、妊娠7ヶ月の女性にお会いしました。旦那様に当たる方とご親戚の方の消息がわからず、探しながら一人で避難所におられる方でした。また90歳の女性にもお会いしました。目がご不自由で慢性の腎機能障害を持ちながら、終日避難所で横になっておられました。そんな方が大勢、いらっしゃいます。当地は4月になっても寒さがまだ厳しく、避難所における食料事情もあまり芳しくはありません。私たちは医療支援と同時に介護の保障、そしてなにより生活環境の改善への取り組みもしなければ解決の糸口さえつかめません。一方、避難所には元気に遊ぶ子供たちの声も響くようになりました。この子たちには生活の保障と同時に教育の保障もしなければなりません。まさに民医連の総合力が試される状況です。

溺水や低体温症など地震と津波による直接的被害を受けた方々が多数搬入された大規模災害急性期の時期を過ぎて、極端に制限された生活環境の中から発生する二次的な災害関連疾患への対応、保健・健康管理、生活環境改善が今、必要になっています。またこれからは本格的な復興をどのように図るか、地域の力が試される時期になります。私たちはそれに合わせた被災地、被災者への支援を行うことが求められていると感じています。なにより職員も被災者であることを忘れないようにしなければ、と思っています。

みなさんへは引き続きのご支援をお願いしなければなりません。これまでいただいた全国からのご支援に感謝すると同時に、改めてその継続をお願いし、メッセージを結びます。